

共同研究の経緯と成果の概要

1990～1992年度の3カ年間にわたって行われた、本館の共同研究「日本人の色彩感覚に関する史的的研究」は、それまでこの種の共同研究プロジェクトが組織されることがなかったため、最初から手探りの状態でスタートし、充分とは言えないまでもある程度の成果を得ることができたのと、今後に向かっての問題を残して無事終了することができた。

ここに、この研究プロジェクトに参加した共同研究員が、相互に専門的立場からの意見交換や討議を重ねた結果、再度、各自の専門領域に立ち戻っていただき、新たにアプローチしなおして取り組んだ論考を集め、この研究報告書を刊行するものである。

とりあえず、ここではこの論集の前書きとして、共同研究の目的あるいは研究プロジェクトの組織、研究会の経過、成果の概要についてを報告しておきたい。

1. 共同研究の目的

共同研究「日本人の色彩感覚に関する史的的研究」は、わが国の歴史的な造形物、例えば衣裳、儀礼用具、生活用具、社会的標識といったものの色彩を対象とし、原始古代から現代までの各時代における色彩の意味、あるいは色の組合せ対比などの規範性といった点を問題とするものである。

また、色の材料や彩色技術の変遷などを科学的に分析したデータに基づいて検証し、日本人の色彩感覚に関する認識のあり方や色彩文化の特性についても、その研究の方法論を含めて検討しようとするものである。

以上は、この研究会を計画するにあたり目論んだ当初の目的であった。

しかし、実際に研究会を進めていくに従って、「色彩感覚」という対象を歴史的に検証することの困難さが痛感され、各研究発表においても色彩感覚に限定した議論を展開することは出来なかった。すなわち、まず色彩に関する各研究者間の認識の違いが指摘されたのと、各時代の色彩事例においてもその対象が多岐にわたっており、それぞれの特質を共通に理解するためには、それなりの時間が必要であった。

さらに、色彩の素材に関する研究においても、その分析方法や抽出方法に違いがあり、特に科学的分析には、器械や器具の仕組み、あるいはデータの読み方そのものを先に理解しなければならず、従って本論に近づいて議論するまでにいたらなかった研究発表もいくつかあったからである。

また、色彩感覚の史的変遷に関しても、その対象は広範囲におよぶものだけに、すべての分野を網羅して研究会を開催することはできなかった。

いずれにしろ、今後に向けての課題が山積みされたことだけは確かである。

2. 共同研究の経緯と共同研究員の組織

1990～1992年度の3年間にわたって行われた研究会は計11回を数え、そのうち3回は本館以外の場所にも会場を求め、現地調査を含めて行われた。

①研究会の実施経過

[1990年度]

第1回研究会 (1990年7月13日・国立歴史民俗博物館)

研究発表 長野泰彦「パーリン・ケイの色彩認識論を中心とした問題について」

坂本 満「西洋と東洋における色彩感覚の違いに関する問題について」

第2回研究会 (1990年11月22日～23日・国立歴史民俗博物館&千葉県内)

研究発表 千野香織「平安時代の紫一色と言葉一」

神庭信幸「色名と色材」

現地調査 鹿島・香取神社の建築彩色 (説明者) 濱島正士

佐原市の曳き山にみる彩色 (説明者) 小林忠雄

第3回研究会 (1991年3月8日・国立歴史民俗博物館)

研究発表 小林忠雄「仮面と民俗の色」

ゲスト発表 宮田 登 (筑波大学歴史人類学系)「白のフォークロアをめぐって」

[1991年度]

第1回研究会 (1991年7月19日～20日・国立歴史民俗博物館)

研究発表 園田直子「合成顔料の色彩とその諸問題及びブルーブル美術館における修復について」

服部幸雄「歌舞伎のなかの色彩表現について」

神庭信幸「ホログラムの実験展示について」

ゲスト発表 杉浦康平 (神戸芸術工科大学)「眼のなかの色」

現地見学 川村記念美術館 (佐倉市内)

第2回研究会 (1991年11月14日～15日・国立民族学博物館&滋賀県竹生島)

研究発表 吉田憲司「色彩の象徴性・再考—アフリカの事例をもとに—」

山口 憲「江戸時代の能装束の色彩」

現地調査 滋賀県琵琶湖竹生島神社の建築彩色

彦根市立博物館の見学

第3回研究会 (1991年12月13日・国立歴史民俗博物館)

研究発表 佐原 真「日本原始古代の色」

永嶋正春「古代中世の漆器の色」

第4回研究会（1992年3月6日・国立歴史民俗博物館）

- 研究発表 小林忠雄「中国の色彩表徴」
村上 隆「近世を彩る一色金の世界一」

〔1992年度〕

第1回研究会（1992年9月25日・国立歴史民俗博物館）

- 研究発表 永嶋正春「縄文・弥生時代の色とその素材について」
橋本裕之「赤い王の舞，青い王の舞」

第2回研究会（1992年11月27日～29日・金沢市にて）

- 研究発表 小林忠雄「金沢の風土と色彩」
ゲスト発表 本谷文雄（石川県立美術館学芸員）「加賀蒔絵の技術と意匠」
花岡慎一（加賀友禅史研究家）「加賀友禅の歴史と文化」
現地調査 花岡加賀友禅など染色資料コレクション，天徳院収蔵資料，真成寺・来教寺の奉納物，金箔資料，石川県立美術館収蔵資料（古九谷陶磁資料及び五十嵐様式蒔絵資料），石川県立歴史博物館収蔵資料（刷物関係資料）

第3回研究会（1992年12月17日・国立歴史民俗博物館）

- ゲスト発表 前田雨城（元平安博物館講師・古代染色研究家）
「三次元蛍光スペクトルによる古代染織遺物の研究及び吉野ヶ里出土の貝紫について」

会 議 総括に関する全体会議

第4回研究会（1993年3月25日・国立歴史民俗博物館）

- 研究発表 坂本 満「色彩知覚の基本について」
会 議 報告書の構成と編集方針について

②共同研究員の組織

共同研究員は当初15名でスタートしたが，1991年度に新たに2名の参加をお願いし，外部メンバー8名，内部9名の計17名によって実施された。その共同研究員のメンバーおよび役割分担の課題は次の通りである。

氏 名	所 属	役 割 分 担
(外 部)		
服 部 幸 雄	千葉大学文学部	芸能史上の彩色の問題
立 川 武 蔵	国立民族学博物館	東洋曼陀羅の色彩問題
長 野 泰 彦	国立民族学博物館	認識人類学と色名問題
吉 田 憲 司	国立民族学博物館	仮面の民族芸術的問題
西 村 康	国立精神神経センター武蔵病院	色彩と精神分析の問題
村 上 隆	奈良国立文化財研究所	金属工芸の色彩の問題
千 野 香 織	学習院大学文学部	中世絵画史の色彩問題
山 口 憲	山口能装束研究所	近世能装束の色彩問題
佐 原 真	奈良国立文化財研究所・考古研究部客員（現在本館）	原始古代の彩色の問題

(館内)	考古研究部)	
坂本 満	情報資料研究部 (現在聖徳大学)	西洋東洋の美意識比較
濱島 正士	情報資料研究部	建築史上の彩色の問題
永嶋 正春	情報資料研究部	古代・中世漆器の彩色
神庭 信幸	情報資料研究部	色彩分類と材料の分析
丸山 伸彦	情報資料研究部	近世衣裳の彩色の問題
園田 直子	情報資料研究部 (現在国立民族学博物館)	絵画の彩色材料と修復
橋本 裕之	民俗研究部	民俗芸能の彩色の問題
小林 忠雄	民俗研究部	都市の彩色と民俗表徴

以上の他に研究協力者として、特にゲストスピーカーをお願いした5名の方々がおられ、その内この報告書では3名の方のご発表を論文化していただき掲載した。

また、研究会を開催するにあたり、事務局を本館の情報資料研究部の丸山・園田研究員に分担していただいた。そして、研究会の推進や報告書作成の基本方針などにあたっては同じく本館の情報資料研究部の神庭研究員の多大なお力をいただいた。

3. 研究成果の概要と編集方針

①研究成果の概要

3カ年にわたる本共同研究は全11回にわたる研究会を通じて多くの成果をあげることができたが、もとよりこの種の研究会は類例が少なく、まず第一に何を論じ合い、何を明らかにするのかといった問題提起の段階で、ある種のとまどいがあった。

研究会の初期段階では、まず色彩の認識の仕方についての論議が行われた。

長野研究員はこれまで問題とされた色彩語彙(色名)に関する正確な認識とは何かといった問題意識のもとでパーリン・ケイ理論の再確認を行い、神庭研究員は日本の色名と色の材料とを対比した上で世界共通の理解を得るため、マンセル表色系などを使った色の確認作業が必要であることを説き、さらに坂本研究員からは東洋人と西洋人の瞳孔の違いから生じる色彩感覚の違いなどの問題が指摘された。

さらに、認識論として吉田研究員からは色彩のシンボリズム論に対して批判的な意見が出され、例えばアフリカのンデンプ族の色彩象徴論を展開したヴィクター・ターナーの調査地における、現地での再検討を行ったところ、この理論が必ずしも妥当ではなく問題があることが立証され、文化人類学会に対して画期的な課題を提出した。

次に歴史的な事象としての色彩の材料や色の価値観、意味の変遷、呪術的要素などについては、多くの事例が出され、特に材料の科学分析などによって、現在残されている遺物の色と製作当時の色彩とに大きなズレのあることが指摘された。

例えば千野研究員によれば、平安時代の文学で表現される「紫」は現在の紫色であるのかは疑わしく、それについて、まず仏像彩色の原則である「紺丹緑紫」において現在褐色に見える部分の紫色材をX線透過撮影や蛍光X線分析装置、顕微鏡などによって調べると、ベンガラ(酸化第

二鉄）あるいは朱（硫化水銀）と群青、朱と藍を混ぜたものが区別され、特に「紫土」と表記された色は奈良時代の絵画ではベンガラを使用しているが、平安時代の後期になると朱と藍の組合せとなり時代により変化したことが判明した。また醍醐寺五重塔の天井板に記された彩色指定文字の「丹」と「子」は、「丹」が赤系で「子」が「紫」で音が同じであり、ベンガラであるなどの新事実が指摘された。

佐原研究員からは縄文時代から古墳時代まで多く使われた色は赤であり、黒は赤をひきたてるためであるが、その他、翡翠、碧玉を使用した腕輪や勾玉、管玉類には緑色への古代人の関心があり問題が指摘された。そして7世紀末の高松塚古墳の壁画にみられるように、この時代から頸飾りや耳飾り、腕輪などのアクセサリが消滅したのは、大陸文化の模倣に伴う、衣服染織の複雑化による装身効果のそれへの吸収であるという仮説が提示された。

同じく、永島研究員からは縄文時代や中世の埋蔵漆器の材料分析の結果や奈良時代の瓦に付着した塗料の分析などの事例が報告され、村上研究員からは室町時代後期に確立したといわれる金色の作品の分析を通じた煮込着色法の技術的変遷について、さらに銅鐸や稲荷山鉄剣、正倉院の赤銅盒子、刀鐔など古代の金属技術にも触れた研究発表があった。特に金属表面の刻みの凹凸による乱反射を利用した銅矛などの技術や黒漆の代用とみられる赤銅の出現等において興味深い問題が指摘された。

歌舞伎研究の色彩について服部研究員からは、主として隈取りなどに象徴される赤色の呪術性についての指摘があり、同じく橋本研究員からは中世芸能である王の舞から赤と青（黒）の一对で演じられる王の舞の事例が紹介され、その起源をめぐって伎楽や舞楽の機能面からのアプローチ、北九州地方の祭礼に登場する陣道の猿田彦或いは火王・水王などの民俗学的なアプローチによる研究発表が行われた。

また山口研究員からは近世初頭の能装束の文様とその復元を通して、山繭など古い時代の養蚕技術、糸染の技術などに触れ、江戸時代の染色世界について発表された。

さらに、園田研究員からは明治以降の油絵の具（展色材）など、色の材料の歴史とその分析結果を通して保存科学すなわち絵画の補修技術の方法についての研究が報告され、また小林研究員は中国の浙江省の民俗社会における色彩事例を通して、日本と中国との色彩観の類似性、差異性の問題が指摘された。

本研究会では共同研究員以外に色彩に関する専門的知見を有する5名のゲストスピーカーによる発表をお願いした。それは余りにも広範囲に及ぶ色彩文化の多様性のためであり、史的研究の性格上止むを得ない処置であった。その内容に関しては本研究報告書において掲載させていただいたのでご参照願いたい。

ちなみに、本報告書に掲載されなかった宮田登氏の研究発表である「白のフォークロアをめぐって」については、ご著書のなかで触れられた民俗学的な色彩の問題の数々を述べられ、本書のなかでは小林が論文中にて多数引用しているので、参照されたい。

同じく、杉浦幸平氏の研究発表である「眼のなかの色」については、①色のかたまり、②赤のシンボリズム、③色の環、といった3つの内容について話され、人間が通常見ている色の性格について、例えばコンクリートでつくられている都市を見るのに、地上から離れば離れるほど色は無くなってゆき、視点を変えると別の色の世界になるといった色彩がもつ本源的な性格に関する問題、色は人間と自然との間では偏ったものであること、また世界的に共通する赤の語源の類似性について、赤と黒との象徴的表現について、さらに色の帯である色環における色立体の考え方についてなど、色彩のもつさまざまな性格やそれに関わる文化の諸問題について、スライドを使用しながら発表された。

このように、宮田、杉浦、本谷、花岡、前田の各氏による研究協力に関しては、ご多忙中のところを我々の研究会にわざわざおめでとうございます、貴重なご研究の一端をお話いただいたわけで、この紙面をかりて共同研究員から厚く御礼を申し上げる次第である。

以上の成果から、とりあえず我々は、これまで人文科学においてとりあげてきた各時代の色彩事例において、それが自然科学による材料分析等によって、これまでの認識とは異なった結果の生じることがあり、そこにはさまざまな問題のあることが分かった。

また、研究員の諸般の事情により、全期間を通じて未発表者が出たことには若干の問題があった。しかしそれは各研究員が、余りにも多忙な研究環境や日常業務にあること、または職場転出などの諸事情、大学など教育機関のカリキュラム日程とうまく合わなかったことなどが原因であったが、これらの未発表の共同研究員においては本報告書において、あらためて稿を起こしていただき、論文をお寄せいただくこととした。しかし、実際には本報告書の刊行計画が厳しい日程によって進められたこともあって、論文が期日までに間に合わなかった方もおられ、多少の無念さがあるが、いずれ何らかの形で発表されることを切に希望するものである。

②報告書の編集方針

本報告書の編集に関しては、第11回の最終の研究会において討議され、これまでの研究発表およびここで組織された色彩の研究者のそれぞれの専攻分野を鑑みて、大きく3つのセクションに分けてまとめることにした。

その第1の課題は、人間（日本人）が、主として物質文化のなかでは様々な形で表現してきた色彩事例に関して、特に色の材料の種類や抽出技術、あるいは色材の混合技術といった素材の処理方法に関する分析研究がある。さらにその色材における材質変化の実態、あるいは材料を駆使した表現技術の歴史的変遷といった課題などもあり、これらをいわゆる「素材論的アプローチ」としてカテゴリー化した。

第2の課題は、人間（日本人）が、過去から現在にいたるまで、色彩感覚をどのように知として捉え、認識してきたか、また文化のなかで色彩というものをどのように位置づけてきたか、さらに精神病理学にはどのような問題があるのかといった課題の研究がある。ここでは特にこれらの人間の基本的な認識のあり方に関する歴史的な経緯や、新たな基礎理論となりうるような色

彩語彙論などを加えた「認知論的アプローチ」としてのカテゴリーが考えられた。

第3の課題は、主として人間（日本人）が色彩を使って各時代において象徴的に表現してきた歴史がある。その表現的意味作用を支配者階級による権力的な象徴機能や社会的な標識（記号）としての象徴機能、あるいは演劇的表現としての象徴機能、ファッション（時代における一過性の現象）的な象徴機能といったような対象として捉えようとする研究がある。すなわち、このような歴史における社会構造や文化形成との関わりにおける色彩研究を、ここではとりあえず「文化論的アプローチ」というカテゴリーを設けた。

以上3つのカテゴリーはこの共同研究においてのみの、あくまで我々が行った研究会での便宜的なものでしかなく、もとより色彩研究には他に様々な問題や研究上の対象分野があるであろうし、現に色彩心理学やデザイン研究などといったなかでの展開があったりして、広範囲におよぶ世界であるため、このような簡単なカテゴリーですべてを分類するものではない。

いずれにしろ、この共同研究の性格から、主として歴史学および人類学を中心とした隣接諸科学の研究者が集まって行われたものであり、その意味では、この報告書を含めた研究成果が従来の研究をどこまで越えることができたのかは心もとないが、これを期に今後、ここに提出された歴史・人類学の課題がさらに進展することを期待するものである。

（研究代表者 小林忠雄）